

9. 鳥越村と別宮地区の老人会

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 葛原, 寛子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4968

9. 鳥越村と別宮地区の老人会

葛原 寛子

- I. はじめに
- II. 鳥越村老人会（白寿会）
- III. 別宮地区の集落単位の老人会
- IV. 高齢者いきいきサロン
- V. 老人会の捉えられ方
- VI. おわりに

I. はじめに

鳥越村別宮地区で調査をした際、話を聞いた人の多くが高齢者だったということもあって、老人会についての話題が多くあった。最初に興味深く思ったのは、週に1度くらいの割合で、バードハミングの温泉施設にでかける日があるということだった。さらに、老人会といっても、村単位のものや集落単位のものなど、様々な名前のついた会を挙げる人が多くて混乱してしまうことがあり、その全容を明らかにしてみたいと思うようになった。これが、老人会をテーマにしようと考えた理由である。個人的には、実家では祖父母と同居しているにもかかわらず、2人が属しているであろう老人会について全く知らなかった自分への反省も込めて、鳥越村の老人会がどのようなものであるのか調べてみた。

鳥越村老人会である白寿会、それを補う形の集落単位の老人会、そして、近年実施され始めた老人クラブ関連の活動である高齢者いきいきサロンについて、活動内容を中心として記述し、それに関わる人の意識を見ていく。

II. 鳥越村老人会（白寿会）

1. 老人会の概要

鳥越村老人会は、上野にある老人福祉センター（以下センターと略す）を拠点として、活動している。このセンターは1978年に1億円の費用をかけて建設された。このうち7000万円は日本財団からの補助であるが、この補助金をもらうために必要だった社会福祉協議会

も同時に組織された。社会福祉協議会の事務局は、白寿会の他にも、遺族会、身体障害者福祉協議会、民生委員会などの事務局であり、役員会をはじめ、決算報告、事業報告をまとめるなどの役割を果たしている。社会福祉協議会は、村とも連携していて、村から年間2000万円の補助金を受けて運営されている。また、共同募金の目標が達成されると、県から事業費が戻ってくるという仕組みになっている。例えばある年に、鳥越村全体で31万円が目標とされた時に、1世帯に約360円の募金が割り当てられて、結果的に31万円を越える募金が集まったとする。この場合、目標額を達成したので20万円、さらに、集まった金額から目標額を差し引いた金額分、この合計金額が県からの返戻金である。こうして戻ってきた事業費は、ボランティア活動の費用や、1人暮らしの高齢者への配食サービスの食材費などにあてている。

鳥越村老人会は、石川郡老人会連合に属しているが、村単位では規模が小さいので、尾口村、河内村、白峰村、鳥越村、吉野谷村の5つの村によって白山麓老人会連合がつくられ、石川郡の老人会の行事へは、白山麓老人会連合として参加する。

老人会の会員となるのは、村の65歳以上の人である。会員数は951人で、うち8割が女性という数字である。会員になると、老人会の活動費として、年間1000円の会費を払い、それが老人会の活動の諸費用にあてられている。

この老人会を運営していく役員は、会長1名、副会長3名、そして理事20名となっている。副会長は、河野、別宮、吉原の3地区から1名選出されている。理事の任期は2年ということになってはいるが、10年近く続けている人もいる。さらに、評議員が各集落から1～2名選出される。評議員の仕事は、各集落の会員への連絡・伝達が主となっている。センター利用の日程を各会員宅へ配布したり、会費の徴収をしたりするのも評議員の役割である。評議員の任期は特に決まっているものではなく、元気でやる気のあるうちはやってもらおうのだという。役員・評議委員会が年に数回あって、そのときにセンター周辺の清掃をする奉仕活動を実施している。役員は、老人会関係のあらゆる行事の運営をするので、かなり忙しいようだ。例えば、10月の報恩講並びに物故者追悼法要の世話方はすべて会長、副会長、理事、または評議員が担当している。また、石川郡老人会連合会、白山麓老人会連合会の総会や研修会への出席も、年間を通して多くあり、重要な仕事である。

2. 老人会の活動

続いて、白寿会でどのような活動をしているのかを、2001年度の活動を参考にまとめてみる。活動は基本的に鳥越村全体で行うのだが、行事によっては、河野、別宮、吉原の3つの地区に分けて行われている。その際、別宮地区の中に、三坂、下出合、上出合の3つの集落も含まれているが、ここでは、この3つの集落を除く、調査対象とした11の集落を別宮地区として記述している。年間行事として大きなものをいくつか取り上げることにする。

まず、会員の研修旅行がある。これは、春と秋の2回実施される。2001年度は、春の研修旅行は1泊2日で富山県の金太郎温泉へ、秋の研修旅行は2泊3日で山代温泉へ出かけた。この2つの研修旅行の目的は少し違って、春の旅行は、少し遠出をして観光をする目的で行っているのに対し、秋の旅行では、温泉でゆっくりしてもらうことを狙いとしている。これは、会員の中で、趣向の違いがあるからで、どちらの要素も取り入れようとしたからである。参加者はこの年、春の研修旅行では119人、秋の研修旅行では103人となっている。全会員数から見れば少ないと言わざるを得ないかもしれないが、バスの乗り降り、長時間の乗車は体力的にきついため参加しないという人が多いのだそう。参加者の多くが60代から70代だということも、そういう理由からだろう。また、参加費を払わなくてはならないので、もったいないからと言って参加しない人も中にはいるようだ。こういうわけで毎年同じような人数に落ち着いている。春の研修旅行について、別宮地区の参加者は、男性8名、女性17名、計25名であった。これは、河野地区の61名、吉原地区の37名と比べると少ないと感じる数字である。また、別宮地区の参加者25名のうち、理事または評議員をしている人は6名である。この割合は、老人会会員数が約950名、役員総数が約120名であることを考えれば、大きいものだと思う。さらに3つの地区を合わせてみても、参加者123名のうち、役員、理事、評議員である人が34名となっていて、4分の1以上を占めている。

宿泊をする研修旅行となるとどうしても躊躇してしまう人がいるため、11月には、地区別に日帰り研修を行った。松任市にある車遊館、CCZ温泉に出かけてゆっくりと過ごした。日帰りということで、参加人数は全体で161人となっており、宿泊を伴ういずれの研修旅行と比べても、参加者は増えている。

体を動かす行事も多い。まずは6月に行われる若返り運動会である。もう18回目を数える。鳥越中学校の体育館で、3つの地区ごとに赤ブロック・青ブロック・白ブロックに分かれて競技する。競技は高齢者の体力などを考慮した大変工夫を凝らしたものになっている。また、保育園児や小学生も参加しているほか、ささゆりクラブというボランティアグループもフォークダンスで参加しており、老人会会員だけにとどまらない、開放的な運動会であると言えるだろう。最後のプログラムは鳥越音頭で、和やかに会は終了する。

そして、7月にはスポーツ交流大会が催される。種目は、ゲートボール、グランドゴルフ、ペタンクの3つである。競技参加者は82名で、種目別に見ると、順に、18名、49名、15名となっている。地区別に比較してみると、河野地区43人、別宮地区10人、吉原地区29人となっていて、別宮地区が他の2地区に比べて少ないことがわかる。競技は老人福祉センター周辺にある競技場で行われる。どれもチームをいくつか組んでの対抗戦となっている。それで成績の良かったチームは、10月に行われる白山麓老人連合スポーツ交流祭りに出場するという運びになる。

また、保育園児や小・中学生との交流も盛んである。12月に鳥越保育所へ出かけ、保育園児のお遊戯会を見学した。もちろん、センターに園児がやって来て一緒に遊ぶこともあるようだ。小・中学生とは、児童や生徒がセンターに慰問にやって来るという形が多い。千羽鶴を折って持ってきてくれることもあるのだという。交流行事は学校側から要請されているのだそうだ。

この他にも、高齢者を対象とした講習会がいくつか開かれる。防火講習会、交通安全教室が、地区別にセンター利用の日を使って行われる。悪徳セールスへの対応について講習されることもある。1人暮らしの方には特に役に立っているのではないだろうか。

年が明けると1月、2月、3月と続けて、仏教講座が開かれる。県内のお寺の住職を招き、講話をしてもらうものである。これには、普段のセンター利用の日比べて多くの人参加しているという特徴がある。これは、高齢者、特に80代以上の人にとって、宗教行事が興味のあるものだというのを、よく表している例だと思う。

これまで紹介してきた行事の中には、センター利用の日に合わせて行なわれているものがあった。そこで続いて、日常的なセンター利用の日とは、どのようなものなのかについて述べる。大まかに説明すれば、3つの地区ごとに月に3～5回、センターに集まり、センターの隣にあるバードハミングの温泉に入り、休憩するというものである。センターまでは福祉バスという無料のバスが出ていて、一番遠い集落を午前9時頃に出発して、午前10時頃に到着する。1つのバスには25人位ずつ乗ってくる。バスが2台になることもあるが、だいたい20～30人が来るのだという。

バードハミングが開館する11時までの間は、センター2階の大広間でおまいりをする。このときお経をあげるのは各集落の「おぼんさん」と呼ばれる人(15章参照)である。その他、センター内にある電気治療器を使うなどして、自由に過ごす。そして、開館時間になると各自バードハミングへ行く。入浴料が無料なので気兼ねしないで利用できるのが良いのだそうだ。昼食の時間も、その過ごし方は自由なので人それぞれである。お弁当を持参してくる人もいれば、もちろんバードハミング内で食事をする人もいる。また、出前を取る人も中にはいる。午後の時間の過ごし方についても基本的に自由である。センターの中で各自昼寝をしたりおしゃべりをしたりする人もいる。その際自宅からお菓子などを持参して、みんなで食べながら楽しそうに過ごしている人も見かけた。対照的に、外へ出てグランドゴルフなどをする人もいる。これはスポーツ交流大会へ向けての練習も兼ねているのだそうだ。

この自由時間の過ごし方には、活動的かそうでないかなど、地区ごとに特徴があるという。別宮地区の人は比較的静かに過ごすことが多いのだそうだ。また、前に書いたように、午後の時間は、仏教講座や各種講習会に充てられる場合もある。たくさんの人に集まってもらうためには都合が良いのだろう。12月から3月にかけて、石川県レクリエーション協会の人

が講師となって、体操をしたり、ベルを演奏したりする。これは、冬は外に出ることが減り、体を動かすことが少なくなるので、少しでも運動をしてもらおうということから始められた。他に、センター利用の日に合わせて、保健婦による血圧測定も行われている。

Ⅲ. 別宮地区の集落単位の老人会

鳥越村全体の老人会としての白寿会の活動は大変活発なものであると思う。しかし、実際には、月に何度かのセンター通いもままならないという人もいる。バスへの乗り降りをはじめ、バードハミングでの入浴なども、体の具合が悪ければなかなかスムーズにはいかず、それが理由で出席できないこともある。特に別宮地区の場合、他地区と比べて交通が不便なためか、老人会の活動への参加者が少ないようである。そこで提案されたのが、集落ごとの集会所へ会員に来てもらって、健康チェックなどをしようというものである。このような集落単位での老人会はいつ頃から始まったものなのだろうか。別宮地区の例を見てゆく。

別宮地区で初めて集落単位の老人会を作ったのは相滝で、名前は達者会という。1996年に、当時の保健婦を中心として結成された。センター利用の日に保健婦が血圧測定などの健康チェックをするが、センターまで行くのが困難な人にはその機会がなくなってしまう。そこで、集落にある集会所にその場を移して実施することで、少しでも外出の機会を作り、「寝たきり老人ゼロ」を目指す、という目的のもとでつくられたのである。年齢制限は基本的にはないが、だいたい80歳以上が対象となっている。ここでは、年に数回、健康教室が開かれている。また、月に1回、保健婦が健康チェックに来る。この達者会のような集落単位の老人会の評判を聞いて、他の集落でも、同じように会を開くところが増えてきたという。

このような高齢者を集める会では、会を運営していく世話役が必要である。相滝の例で見ると、その役割を担っているのが同じ相滝のコスモス会で、1ヶ月に1回の会を、世話している。コスモス会のメンバーは11人で、60～70歳くらいの女性たちから成っている。警察官、ケアハウスの職員、僧侶などを講師として招いて、話をしてもらうこともある。

ただ、集落別という小さな単位になると、老人会というものを特に定めている所は少ない。例えば、阿手の場合、婦人会があるのだが、そのメンバーが既に高齢者という形になっているので、それを老人会のようなものとして認識しているという。

このような集落ごとの老人会の参加者については、考えるべき部分が多い。60～70代という相対的に若い年齢層の参加者が多いところ、逆に80代以上の参加者が多いところにわかれるということがそのひとつだ。これは、その集落ごとに年齢層がばらついているからというだけではない。いくら65歳以上でいわゆる高齢者とされていても、80代90代の人と

比べると、そこには一世代分ほどの年齢差がある。当然、嫁と姑が同じ会に参加するというのは不自然ということで、どちらか一方が参加するものだと考えられているようである。そうならば外へ出て行くのは、自然と体の自由がきく若年層になる。また、同じ世代で話の合う人が参加しないのなら自分もしない、というように、気の合う、合わないの問題もあって、参加者の年齢層は偏る場合があるのだ。80代以上という老年層には会に参加しづらいと思っている人も多いようで、そういう人には、「できれば同じ地区の中で若い人が呼びかけ、誘い合って参加してもらえるのが一番いいのではないか」と保健婦のIさんは言う。若年層と老年層が一緒になる会では、60～70代の若年の参加者は、どちらかという、保健婦を手伝うなど、会の世話役のほうにまわることがあると言う。このように若年層が老年層を援助していくという形を取れば、集会をうまくすすめていくことができるように思う。

IV. 高齢者いきいきサロン

1. 高齢者いきいきサロンとは

これは、石川県老人クラブの活動のひとつで、高齢者相互支援事業の一環として、1995年度から実施されているものである。老人クラブというのは、財団法人全国老人クラブ連合会という全国組織であって、都道府県・指定都市老人クラブ連合会、市町村区老人クラブ連合会、単位老人クラブと組織されている。単位老人クラブは、別宮地区で言うと、別宮地区第1老人クラブと別宮地区第2老人クラブの2つである。老人クラブの会員資格は入会を希望する概ね60歳以上の人であり、1つの単位老人クラブに50～100名までが標準とされている。老人クラブは、全国社会福祉協議会や都道府県老連とも連携している。

高齢者いきいきサロンの目的は、日頃、家に閉じこもりがちな高齢者の社会参加の促進を、高齢者相互の支援によって実施すること、とされている。内容は、老人クラブの会員が、後期高齢者（75歳以上）の人を招待して実施する定期的な会食会を、県が支援するものである。招待の対象者は、優先順位として、後期高齢者で家に引きこもりがちな人で、独立歩行が可能な人のうち、1人暮らしの人ないし高齢者のみの世帯に属する人、とされている。参加者側は、老人クラブの会員でなくても良い。

2. 鳥越村での高齢者いきいきサロンの活動

このいきいきサロンは、老人クラブ長がいる集落ですることになっている。鳥越村では1997年から始められ、現在は4つの地域が対象となっている。別宮地区では、杉森と神子清水が合同で実施している。これは当初、民生委員の仕事となっていたが、次第に地域的な活動へと変わりつつある。そのため、保健婦による健康教室という形でいくつかある集落単

位の老人会とは、食事を取るか取らないかで区別をつけている。センターの利用日以外の日を選んで、20～30人くらいの人を招待して、センターで調理をして会食会を開くのである。調理をするのは基本的に会員の女性であるが、会員以外でもボランティアでやってくれる人もいる。調理のための材料費には、県老人クラブから出される年間10万円の活動費があてられる。その他に、参加費を300円ずつもらうことになっているが、これは、遠慮や気兼ねをすることなく参加してもらおうという配慮からである。県老人クラブからの指導としては、会食以外に行う活動は自由となっているので、会食以外にも、保健婦や駐在所の警察官、僧侶を招いて話をしてもらおう。さらに、3回に1回程度の割合で、日帰り旅行に出かけるなど、工夫をしている。参加者はこの日帰りの旅行にはとても喜んでいるのだそうだ。

しかし、問題点も多い。活動回数は基本的に月1回以上が目標となっているが、実際は2ヶ月に1回くらいしかできていないようである。それは、どうしても参加者が固定されてきてしまうことが挙げられる。本来は、閉じこもりがちな後期高齢者に参加してもらいたいのだが、実際はそれほど高齢になると、外出を億劫だと思う人が多く、なかなか人数が集まらないので、75歳以上ではなくても参加できるようにしている。

V. 老人会の捉えられ方

村全体の老人会、集落単位の老人会、そして新たな試みとしての高齢者いきいきサロンは、人々にどのように捉えられているのだろうか。

まずは、参加する側の人についてであるが、センター利用の日に頻繁にやって来る人は、無料バスが出ているし、温泉にも入ることができて、さらに友達同士で会話ができるという楽しみもあり、満足しているという意見が多かった。しかし、その一方で、利用者が固定化されているのも事実である。体の調子が悪いとか、田畑の仕事があるからという理由がある人もいるが、わざわざ出かけていくことを面倒だと思っている人もいる。特に、村全体が対象となっている白寿会の行事については、センターが活動の拠点となっているため距離の面で不便であること、また、村全体の集まりとなると気が張ってしまうことを理由に、参加を渋る声も多く聞かれた。他にも、自分たち高齢者よりも、子どもたちのためにお金を使って欲しい、という意見もある。

また、年齢層によって、参加者が偏る行事もある。年間行事である春と秋の研修旅行、運動会、スポーツ交流大会などには、60代70代の人参加が多いのに対して、日常的なセンター利用となると、ほぼ、80歳前後の人に限られてくるという。これは、体が元気で行動的な人はどうしても若年層に偏ってしまうから、という理由だけではなく、世代間の興味の

違いにも因る現象だと思われる。例えば、講などの宗教行事について若い世代があまり知らないということは、聞き取り調査をしていても明らかであるが、高齢者と呼ばれる65歳以上の人でも、若年層では、次第に宗教行事に関する興味は薄れていっているのが現状である。逆に老年層の人は、講や仏教講話になると、興味を持って参加をするし、センター利用の日にも午前中におまいりをするという熱心さがある。この点では、同じ高齢者でも、若年層と老年層とでは、老人会に求めるものが異なっていると言えるのではないだろうか。

では、老人会を運営していく人にとっては、老人会はどう捉えられているのだろうか。それを考えるにあたっては、まず、老人会の役員もすべて65歳以上で老人会の会員であることに注目したい。老人会というのは、高齢者による高齢者のための会なのだと言えるだろう。もちろん、事務的な仕事等には、様々な年代の人が関わっているが、高齢者が中心となって動いている会である。大きな行事の前には役員会を開いて綿密に計画を立てなければならないし、いくつもの行事で役員を兼任しているのが実情だ。また、年間行事へは、老人会の運営に関わっている人の参加する割合が高いということから、参加者が少ない場合に、積極的に参加していくのが理事や評議員をはじめとする役員なのだ、という印象を受ける。鳥越村の老人会では年間行事が多いので、非常に忙しいのだと、役員の人1人は言っていた。集落単位の老人会でも、運営する人の自己負担は大きいようで、補助を求める意見もある。

また、運営する側として、参加者が限られてしまうという問題にもぶつかっている。日頃あまり外出をしないような高齢者に参加して楽しんでもらいたいと思っても、参加は本人の意志に任せられるので、なかなか実現は難しいのである。

VI. おわりに

鳥越村の老人会について調査してみて、その行事の多さにまず驚いた。これほど定期的に様々な種類の行事がある老人会は、少なくとも私が生まれ育ったところではなかったもので、高齢者関連の事業に関して先進地域なのだという印象を受けた。

しかし、これからの老人会のあり方については、考えるべき点も多いように思える。介護保険制度がスタートし、高齢者の寝たきりや痴呆といった問題を相談する人が増えたことにより、高齢者の介護等は開かれたものになってきているそうだが、それでもまだ、昔のように高齢者は家にいればいいという考えも残っている。そういう考えで家に閉じこもりがちな人にも、決して無理強いをしない形で参加してもらうことは、困難ではあるが、これからの老人会の課題の1つであると思われる。

また、V.でも書いたように、高齢者の中にも年齢層によって趣向の違いがあることは、

老人会の行事を決める上で問題になってくるだろう。これから先、若年層の高齢者が、宗教行事に積極的に参加していくとは限らず、今よりも参加者が減ってしまうかもしれない。そうになると、別に、文化的なサークル活動をつくったりする必要も出てくると思う。

鳥越村の人口は高齢者の占める割合が高く、高齢者を支える人手が足りないのは確かであるが、この状況であるからこそ、高齢者相互の支援が重要になってくる。村単位の老人会も集落単位の老人会も、若年層と老年層が共に積極的に参加して、さらに活動的な老人会になっていくことを期待する。